

齋田 浩司さん 機械工学科 1986年卒業



◆ 経 歴

- 1986 年 武蔵工業大学工学部機械工学科卒業
- 1986 年 Seattle Pacific University 英語集中コース入学
- 1987 年 University of Idaho 建築学修士課程入学
- 1989 年 DIS (デンマーク) へ交換留学
- 1990 年 University of Idaho 建築学修士課程修了
- 1990 年 旭化成工業株式会社住宅事業部入社
- 1994 年 三井ホーム株式会社入社
- 2005 年 ISG Asia (Japan) Limited 入社
(シティバンク銀行、リーマン・ブラザーズ日本法人などを担当)
- 2008 年 アボットジャパン株式会社入社
- 2021 年 マンダリン・オリエンタル東京株式会社入社
- 2024 年 ジョーンズ ラング ラサール株式会社入社 (日本オラクル株式会社を担当)
- 2025 年 PQE Japan 株式会社入社 (現職、外資系製薬会社を担当)

◆ 本人コメント

・ 機械工学科卒業と建築への方向転換

高校時代は航空機や自動車に関心があり、機械工学科へ入学しました。一方、父が建築家で、大学時代にその仕事を手伝ううち、建築にも次第に興味を持つようになりました。その思いが進路として明確になったのは、卒業後に渡った米国で、豊かな住宅建築を目にしてからでした。

・ 米国留学と建築教育

両親の勧めもあり、大学入学後すぐに海外留学の準備を始めました。1 年次から英会話研究部 (MITESS: Musashi Institute of Technology English Speaking Society) に入り、ディベートやディスカッションに取り組みました。しかし、卒業の段階では米国大学院が求める英語力に届かず、まず Seattle Pacific University の英語集中コースに入り、文字どおり一日中英語に囲まれる生活を始めました。

日本で事前に留学先について相談した際、「ロサンゼルスのような温暖な気候の大都市よりも、落ち着いて勉強できる北西部の大学が良い」と勧められ、ワシントン州を選びました。雨の多いシアトルでしたが、勉強に集中するには恵まれた場所でした。

語学留学中に米国の住宅建築を実際に見て、建築の道へ進むことを決意しました。幸い、工学部機械工学科卒でありながら入学を認めていただき、University of Idaho の建築学修士課程に入学することができました。

・ デンマークへの交換留学

父は当時、北欧から住宅部材、家具、照明、食器などを輸入し、レンガ住宅やログハウスを手掛ける小さな会社を経営していました。米国の大学で DIS (Denmark's International Study Program) への交換留学制度を知り、1989 年、コペンハーゲンで建築とデザインを学ぶ機会に恵まれました。DIS は独立した教育機関でしたが、デンマーク王立芸術学院の教授や学生と共同で建築課題に取り組む機会があり、その後の私の建築観に大きな影響を与えました。

・ 住宅事業での経験

帰国後は日本企業への就職を選びました。当時は年功序列の色が濃く残っており、まず日本企業で同期の仲間をつくり、一級建築士資格を取得することが大切だと考えたためです。旭化成工業株式会社の住宅事業部に入社後、資格も取得し、建築家として順調なスタートを切ることができました。

一方、米国や北欧で見てきた自由設計の木造住宅への憧れも残っていました。そこで、米国のデザインや構法を積極的に取り入れていた三井ホーム株式会社へ移り、研究開発、戸建住宅の設計、技術系社員の育成などを担当しました。特に印象に残っている仕事の一つが、東京ディズニーランドの「ミッキーの家」「ミニーの家」「グーフィーの家」を担当させていただいたことです。通常の住宅とは異なる、まさに究極の自由設計でした。

旭化成では鉄骨系住宅、三井ホームでは木造住宅に携わり、さらにコンクリートや杭の開発部署も経験しました。結果として、鉄骨造、木造、RC 造という主要な構造分野に触れられたことは幸運でした。この知識や経験は、その後の建築コンサルティング業務にも生かされています。

・ 外資系企業とファシリティマネジメント

バブル経済の崩壊後、三井ホームが海外の事務所や研究拠点を閉鎖する中で、海外で学んだ経験と英語を仕事に生かしたいという思いが強くなりました。そこで 42 歳の時、外資系企業向けに日本でのオフィス開設から運営までを支援する ISG Asia (Japan) Limited へ転職しました。

ここで本格的に携わったのがファシリティマネジメントです。これは建物を設計・施工するだけでなく、企業が働く場所を計画し、維持管理し、継続的に改善していく仕事です。シティバンクやリーマン・ブラザーズなどを担当し、建築家として「つくる側」から、建物を使う企業の立場で「支え、育てる側」へと視野が広がりました。

・ 製薬、ホテル、IT 企業、そして製薬工場へ

2008 年春、米国系製薬会社のアボットジャパン株式会社へ転職しました。同年秋には世界金融危機が起こり、社会や経済の状況が大きく変化することを実感しました。アボットジャパンでは、本社、全国の営業拠点、工場の施設管理を担当しました。13 年間の在職中に組織再編や企業統合が相次ぎ、そのたびに数百人規模のオフィス拡張や統合に対応しました。

その後、マンドリン・オリエンタル東京株式会社に移り、コロナ禍後半のレストランや客室の改修を担当しました。各国の要人や賓客を迎えるホテルならではの安全性、品質、工期への細やかな配慮は、ほかの業界では得難い経験でした。さらに IT 企業の施設管理を経て、2025 年からは PQE Japan 株式会社に所属し、製薬工場建設プロジェクトにコンストラクションマネジャーとして携わっています。

・ 振り返って思うこと

振り返ると、機械工学から建築へ進んだことは、一見すると遠回りに見えるかもしれませんが、材料、構造、品質管理など、大学で学んだ工学的な考え方は、建築やファシリティマネジメントのあらゆる場面で生きてきました。

一方、英会話研究部での活動は、入部時に思い描いていた通り、その後の留学と外資系企業での仕事の土台になりました。英会話研究部の活動を通じて知り合った他大学の仲間とも、今なお日々連絡を取り合っています。

現在、24 人の職場チームには日本人が 5 人おり、そのほかは世界各国から集まった技術者です。建設の仕事も、英語を共通語として多様な専門家が協働する世界だと実感しています。年齢そのものより、経験と役割への適性が重視される環境にも支えられ、60 歳を過ぎた現在も新しいプロジェクトに取り組んでいます。

父が建築家でなければ、この道へ進むことはなかったでしょう。しかし、おかげで生涯続けられる仕事に出会えたことを父には心から感謝しています。

仕事を離れた時間には、ゴルフやスキーのほか、ピアノやギターを楽しんでいます。これからも心身の健康を保ちながら、建築と人との出会いを楽しみたいと思っています。

◆ 写 真



英会話研究部での他大学との合同ディスカッション。
本人は最後列左から5人目(1984年)



機械材料研究室の皆さんと。本人は最後列左から3人目
(1986年)



Seattle Pacific University の寮の自室にて
(1986年)



DIS 留学中、デンマーク王立芸術学院の学生との共同建築課題に取り組む
(1989年)



University of Idaho 建築学修士課程修了時、母とともに
(1990年)



三井ホーム勤務時代、人事部門で技術系社員の育成を担当
(2000年)



ISG Asia (Japan) Limited 勤務時代、外資系企業向けの
建築コンサルティングに従事(2006 年)



アボットジャパン勤務時代、本社・営業拠点・工場の
ファシリティマネジメントを担当(2010 年)



外資系製薬工場建設の現場事務所にて
(2026 年)



カリフォルニアのゴルフ場にて(2025 年)